企業名：　　スタンレー電気

レポート名：　統合報告書 2022

1.　この会社が目指している将来の姿が理解できるか

とても良く理解できた。スタンレー電気が目指している姿は「競争力のある会社」であると統合報告書の見出しから読み取ることができ、その「競争力」とは競合他社との競争に勝つのではなく、この会社の存在価値である「光の価値を最大化して社会に貢献する」をより多くの客や社会に届けるための「競争力」であると対談で社長自らが述べている。さらにその「社会への貢献」という曖昧なフレーズを、スタンレー電気独自の「交通死亡事故ゼロへの挑戦～安心安全を全ての人へ～」、「『健康で安全な暮らし』の実現～光の価値の提供」、「環境と価値創造との調和」、「一人ひとりの幸福と成長」、「盤石な経営基盤の構築」という言葉で説明している。これらの項目は現代社会の課題を解決する方法の提案ともいうことが可能であり、これらの解決は社会全体に良い影響を与えるだけでなく、スタンレー電気が社会にとって不可欠なものとなり、会社の持続的成長を見込むことを可能にする。また、それぞれの課題解決へのアプローチはとても具体的でありわかりやすく、期待をもてるものであった。

創業してから 100 年間の歴史を掲載していたことも、この会社の将来の姿を思い描く助けになっていると思う。というのも、これまでの軌跡というものはいわば会社が蓄積してきた財産であり、そこには「昔の会社」が思い描いていた「将来の姿」が現れ、その理想を絶え間なく、成功と失敗を挟みながらも受け継いでいった姿が現在の姿であるからである。今会社が思い描いている理想もその連続した理想の一片であり、そこには今までの理想が集約されているのだ。

2.　この会社の現在の競争優位性が理解できるか

前述した通りスタンレー電気が目標とする姿は他社との競争に勝つことではなく、社会に貢献するためにより多くの製品を届けるための競争力を持つことである。同社はそこで、自分たちの競争優位性は「光源技術を保有し、独自の光の価値を社会へ提供している」ことであるとしており、統合報告書内では同社が力を注いでいるそれぞれの事業だけでなくその開発、調達、生産、販売の段階における価値の創造に重きを置いたビジネスモデルを図式化して表している。

また、19 ページによるとスタンレー電気は 2021 年に三菱電機会社と車載用ランプシステムに関する業務提携契約を締結したという。三菱電機からはドライバーの状態をモニタリングし、居眠り運転や脇見運転時に警告を表示してドライバーが安全に運転できるようにする DMS を提供してもらい、スタンレー電気は運転状況に応じて様々な光の制御ができる

ランプシステムを提供するという、両者の得意分野を掛け合わせることによって交通事故の削減に貢献している。このように大手企業と業務提携を結ぶことができること、さらにその提携を行えるほどの技術力を保有していることがこの会社の競争優位性であることがわかる。

3. その競争優位性に持続性があるかどうか理解できるか

上記のビジネスモデルについては、スタンレー電気が提供するそれぞれの事業において、強みだけでなく現段階でのリスクやその事業が活用される機会なども自ら分析することによって、強みを伸ばすのみならず弱点を克服し、優位性を維持していこうとする意思がみられた。また、それぞれの事業を伸ばすだけでは会社として存続していけるとは限らず、その社会での潮流に合わせた変革が必要となるのだが、同社は環境問題への対応、人権の尊重による一人ひとりの幸福の実現、経営の充実について事細かに対策を練り、説得力のある主張を行なっている。

三菱電機との提携については、提供を受けている DMS が近年日本でのガイドライン策定検討や欧州での新型車への搭載義務化が進められていることによって、今後も同社のライトが搭載された自動車の普及が進むことが期待されている。

このように、スタンレー電気の競争優位性には持続性があるのではないかと考えられる。

4. この会社で自身の人的資本の価値向上を達成できると思うか

この会社の経営方針は利益第一というより社会への貢献を意識しているのだなという第一印象を持った。この信条は僕が目指している将来の姿ととても似ており、まずともに働きたいという意欲を湧かせるには十分であった。また、28 ページの人材育成の項目で述べられている人材育成計画の作成や講習会、研修会などの能力開発制度、職業別教育の強化といった充実したスキルアップの機会は自身の人的資本の価値を向上させることにとても役立つのではないかと思えた。現在の役職や能力、目的によって選択できる施策はかなり魅力的に映った。

5. 報告書のよかった点はどこか、どのような改善余地があるか

まず、統合報告書の構成が会社の現状や事業内容から始まっていることにより、私のように事前知識を持たない者から見てもわかりやすいものになっていた。また、価値の創造の部分で独特の図を用いて課題の発見から解決、価値の創造までの筋道を示しており、強烈に目を引くとともに理解もしやすくなっていたと思う。特に感心した部分は、序盤の社長対談の文章でこれから話す内容のキーポイントを提示しておくことで、統合報告書内で後述される内容を記した意図などが明確になり、読者により伝わるようなデザインになっていると思う。

一つ気になったことは、ちょっとしたことではあるのだが、初出の略語には索引をつけていただけるとさらに理解が深まるだろうということである。たとえば社長対談で「ADAS」

という言葉が初めて出てきたと思うのだが、そのページの中には ADAS の説明はなく、19 ページに初めてその説明が記載されていた。統合報告書を閲覧する人物は、それなりの前提知識を持った人であることが多いと思うのだが、誰が見てもわかりやすいような文章にすると、より良い統合報告書になるのではないかと思った。